IR ILL 98回のコピーより、1回のスキャン。絶対。

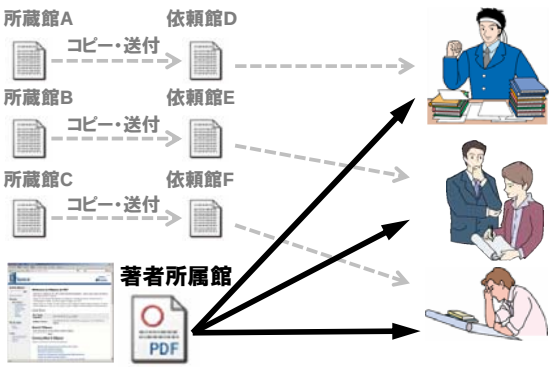
小樽商科大学・北海道大学
千葉大学・金沢大学・大阪大学・広島大学

領域2「学術情報資源共有のための図書館間文献デリバリーサービスを機関リポジトリ構築によって代替するための教員・図書館連携方式の開発」 website: http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?IRcuresILL contact: ircuresill@office.otaru-uc.ac.jp

なぜIRは無料なのに、ILLは35円とるのか？

＜IRcuresILLの概要＞

1. IRとILLは同じサービスの別の側面。IRコンテンツが増えれば、研究者もIR担当者もILL担当者もうれしいはず



2. 現実には、IR担当者とILL担当者は別々に業務を行っている
➔ 研究者、IR、ILL担当者の3者が協力し合うことで、3者を含む周辺全てがHappyになるのでは!?

＜そこで考え、やってきたこと＞

★ 著者所属館にILLを依頼するモデル

その1「無料ILL」（小樽商科大学）
1. 自機関所属研究者の著作へのILLに無料で対応
2. IRなら無料だし
＜問題点＞依頼する段階で著者の所属が分かるケースは機関発行物の他はほぼない
↓
DRFワークショップ等での意見交換
図書館のIR実務担当者、ILL実務担当者へのアンケート
↓
その2 DRF参加機関による実証実験（小樽商科大学、北海道大学）
1. 依頼したILL文献が到着した段階で、その文献の著者が北大/小樽商大の研究者であれば記録する
2. 北大/小樽商大のIR担当者はその記録をもとに、当該著者へIR搭載をはたらきかける
＜問題点＞もう所属していない、同姓同名の別人等でIRに活用できない

★ どのような文献がどのぐらい求められているのか、どのようにILLで解決されているのか

NACSIS-ILLデータ分析（図1）
1. 平成19年度1年分のNACSIS-ILLレコードを、文献タイトル単位で集計
2. やりとりの多かった文献トップ1000のリストを作成した。このうち、複写回数ベースで上位20頻度に位置する39文献を対象とて、学術分野、依頼館／受付館のパターン等についてさらに調査。

図1

	著者,文献タイトル	掲載誌	巻号	ページ	出版年	大学刊行物	刊行大学受付率	回数	依頼館数	受付館数	該当巻号所蔵館数	オンライン公開	備考
1	坂野雄二ほか, 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み	行動療法研究 / 日本行動療法研究会<AN00084471 >	12(1)	73-82	1986			98	75	33	52		中部学院大13、東北福大8、愛知大7、福教大5、ノ博女4、群大4、看大4、香大医分4、千大家4、川崎医福4、日体大4、明大4、桃医大3、横市大医3、ほか12大学各2、3大学各1
2	尾関友佳子, 大学生用ストレス自己評価尺度の改定：トランスアクショナルな分析に向けて	久留米大学大学院比較文化研究科年報<AA11338999>	1	95-114	1993	○	100%	78	67	1	1		久大御井78（全）
3	鈴木伸一ほか, 新しい心理的ストレス反応尺度の開発と信頼性・妥当性の検討	行動医学研究 : 日本行動医学会誌<AA11647042>	4(1)	22-29	1997			65	54	4	4		文教大30、桜美林21、秋大医7、早大所沢7
4	神村栄一ほか, 対処方略の三次元モデルと新しい尺度(TAC-24)の作成	教育相談研究 / 筑波大学教育研究科<AN00264194>	33	41-47	1995	○	36%	64	55	27	43		筑大13、筑大大塚9、礼模学院大5、岐大3、滋大大学3、上教大3、創価大3、ほか5大学各2、15大学各1
5	牧野カツコ, 乳幼児をもつ母親の生活と「育児不安」	家庭教育研究所紀要<AN00361902>	3	34-56	1982			57	50	30	75		名女大天8、鎌倉女大5、鳴教大5、四国大3、上教大3、桃美大3、ほか6大学各2、18大学各1
6	鈴木安名, 新卒看護師の職業性ストレス簡易調査票の分析 早期離職を防ぐには	病体生理 / 東京保健会病体生理研究所<AN10204478>	39(2)	31-39	2005			48	42	5	5		横市大医19、奈良医大17、慶大医6、大邪医5、ほか1大学1
7	土居内麻理, 終末期がん患者の疲養上の意思決定	高知女子大学看護学会誌<AA11404749>	31(1)	19-26	2006	○	5%	43	33	6	7		高大医26、聖路加看大7、北里看4、ほか2大学各2、1大学1
8	詫摩武俊ほか, 愛着理論からみた青年の対人態度 : 成人版愛着スタイル尺度作成の試み	人文学報 / 東京都立大学人文学部,<AN00122923>	196	1-16	1988	○	67%	42	30	13	172		首都大学28、労図3、ほか11大学各1
9	中川薫, 重症心身障害児の母親の「母親意識」の形成と変容のプロセスに関する研究	保健医療社会学論集 / 日本保健医療社会学会<AN10421975>	14(1)	1-12	2003			38	35	7	11		愛媛大15、法大7、北大医体7、日赤看大5、日福大3、ほか1大学2、1大学1
9	尾崎フサ子ほか, 看護婦の職務満足質問紙の研究 Stampsらの質問紙の日本での応用	紀要 / 大阪府立看護短期大学<AN10563040>	10(1)	17-24	1998	○	50%	38	25	15	53	3-9巻OA	阪府大羽19、愛媛医技大3、天使大3、ほか1大学2、11大学各1
10	鶴山愛子, 産後1ヶ月の母親が必要としているソーシャル・サポートの検討	日本ウーマンズヘルス学会誌<AA11671444>	4	19-31	2005			37	31	4	6	有料公開	天使大16、阪府大羽12、東女医大8、ほか1大学1
11	中田洋二郎, 親の障害の認識と受容に関する考察 : 受容の段階説と慢性的悲哀	早稲田心理学年報 / 早稲田大学文学部心理学会<AN00258415>	27	83-92	1995	○	54%	35	31	13	44	htmlでOA	早大中央15、早大所沢4、川崎医福3、ほか3大学各2、7大学各1
11	堀毛裕子, 日本版Health Locus of Control尺度の作成	健康心理学研究 / 日本健康心理学会<AN10483586>	4(1)	1-7	1991			35	34	17	42		弘大6、京文大5、神戸親和5、ほか5大学各2、9大学各1
12	福西勇夫, 日本版General Health Questionnaire (GHQ)のcut-off point	心理臨床< AN10198659>	3(3)	228-234	1990			31	28	11	39		中部学院大6、梨大6、弘大5、愛淑大3、広修道3、文教大3、ほか5大学1
13	尾関友佳子, 大学生のストレス自己評価尺度	久留米大学大学院紀要：比較文化研究<AA11339051>	1	9-32	1990	○	100%	30	27	1	1		久大御井30（全）
14	熊江奈央, 癌告知患者の精神的援助の在り方について	鹿児島県母性衛生学会誌<AA11509409>	10	10-14	2005			29	25	4	4		鹿大桜14、横市大医7、秋大医5、梨県大看3
14	中村直美ほか, 中学生における他者への愛着とレジリエンスとの関連について : 性差についての臨床心理学的研究	上越教育大学心理教育相談研究<AA11658184>	6(1)	1-11	2007	○	93%	29	28	3	7		上教大27、ほか2大学各1
15	堀井俊章ほか, 対人恐怖心性尺度の作成	上智大学心理学年報<AN00115644>	20	55-65	1996	○	86%	28	27	5	72		上智大24、ほか4大学各1
15	沢崎達夫, 自己受容に関する研究1：新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討	カウンセリング研究 / 日本カウンセリング学会<AN10071578>	26(1)	29-37	1993			28	23	17	80		京文大4、純心図4、鳴教大3、ほか3大学各2、11大学各1
16	阿部美佐子ほか, 終末期がん患者との関わりにおけるジレンマ	看護研究 / 新潟県立がんセンター新潟病院看護部<AA12066362>	17	1-6	2006			27	20	1	2		横市大医27（全）
16	堀井俊章ほか, 対人恐怖心性尺度の作成（続報）	上智大学心理学年報<AN00115644>	21	43-51	1997	○	74%	27	25	6	72		上智大20、ほか2大学各2、3大学各1
16	中川薫, 子と自分のバランスをとる : 重症心身障害児の母親の意識変容の契機とメカニズム	保健医療社会学論集 / 日本保健医療社会学会< AN10421975>	15(2)	94-103	2005			27	24	8	11		愛媛大11、法大5、北大医保4、ほか2大学各2、3大学各1
17	伊藤友美ほか, 倦怠感のある終末期がん患者への下肢アロママッサージの有効性	淀川キリスト教病院学術雑誌<LA01466092X>	21	13-15	2004			26	25	1	1		横市大医26（全）
17	加藤和生, Bartholomewらの4分類愛着スタイル(RQ)の日本語版の作成	認知・体験過程研究 /認知・体験過程研究会<AN10382716>	7	41-50	1999			26	22	1	1		九大26（全）
18	菊池和子, がんターミナル期患者家族および遺族へのケアの検討 : 遺族の面接調査より	家族看護学研究 / 日本家族看護学会<AA11218931>	11(3)	108-115	2006			25	23	13	36		福井県大4、北里看4、横市大医3、新大雄3、ほか2大学各2、7大学各1
18	藤内美保ほか, 看護師の臨床判断に関する文献的研究 : 臨床判断の要素および熟練度の特徴	日本職業・災害医学会会誌<AA11450128>	53(4)	213-219	2005			25	20	16	45	有料公開	滋医大3、ほか7大学各2、8大学各1
18	石原さとみほか, 看護理論を通して障害受容の段階と患者と看護師の関係を考える	日本リハビリテーション看護学術大会集録<AA11868427>	17	70-72	2005			25	24	7	10		新潟医療大8、取大医6、日赤豊大3、和医大三3、ほか2大学各2、1大学1
18	都築誉史ほか, 大学生におけるメディア・コミュニケーションの心理的特性に関する分析 : 対面,携帯電話,携帯メール,電子メール条件の比較	応用社会学研究 /立教大学社会学部研究室<AN00026486>	42	15-24	2000	○	68%	25	23	8	101	44-50巻OA	立大17、ほか1大学2、6大学各1
18	岡安孝弘, 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の作成	宮崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要<AN10455241>	6	73-84	1999	○	96%	25	21	2	4		宮大24、ほか1大学1
18	中原純, 痴呆性高齢者の家族介護における負担感 : 介護者の態度と介護状況を通して	高齢者のケアと行動科学 / 老年行動科学研究会<AN10491551>	10(2)	71-76	2005			25	21	8	19		北星大5、愛淑大4、滋賀大4、聖路加看大4、和医大三3、ほか2大学各2、1大学1
19	Folstein MF et al.,"Mini-Mental State" a practical method for grading the cognitive state of patients for the clinician	Journal of psychiatric research<AA00705646>	12(3)	189-198	1975			24	21	13	14	htmlでOA	兵庫医大4、名工大4、ほか5大学各2、6大学各1
19	森崎聡美ほか, 夫立ち会い分娩に臨む夫婦への援助の方向性 : 夫立ち会い分娩でより満足が得られるために	日本ウーマンズヘルス学会誌<AA11671444>	2	104-111	2003			24	20	3	6	有料公開	天使大11、阪府大羽8、東女医大5
19	野口裕二, 高齢者のソーシャルサポート : その概念と測定	社会老年学 / 東京都老人総合研究所<AN00111257>	34	37-48	1991			24	20	19	176		純心図5、ほか1大学2、17大学各1
19	関知恵子, 人格適応面からみた依存性の研究 自己像との関連において	臨床心理事例研究 / 京都大学教育学部心理教育相談室<AN00338740>	9	230-249	1982	○	0%	24	23	1	2		和大24（全）※刊行元の京都大学には所蔵なし
20	近藤真紀子, ターミナルケアに従事する看護師へのサポートに関するシステマティックレビュー	臨床死生学 / 日本臨床死生学会	11(1)	51-60	2006			23	19	5	9	有料公開	東医大10、天使大7、東洋英女大院4、ほか2大学各1
20	及川裕子, 親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討	日本ウーマンズヘルス学会誌<AA11671444>	4	81-91	2005			23	22	3	6	有料公開	天使大10、阪府大羽9、東女医大4
20	梶原弘平ほか, 認知症高齢者を介護する家族の介護継続意向の要因に関する研究	日本認知症ケア学会誌<AA12065508>	6(1)	38-46	2007			23	16	10	16		梨県大7、横市大医4、北星大4、ほか1大学2、6大学各1
20	前田大作ほか, 老人の主観的幸福感の研究 : モラールスケールによる測定の試み	社会老年学 / 東京都老人総合研究所<AN00111257>	11	15-31	1979			23	21	21	191		2大学各2、19大学各1
20	福田一彦ほか, 自己評価式抑うつ性尺度の研究	精神神経學雑誌<AN00128067>	75	673-679	1973			23	20	17	136		京文大3、ほか4大学各2、12大学各1

※色付きは所蔵館が10以下の文献。2位と13位の尾関論文、15位と16位の堀井論文は、それぞれ同一テーマを扱った2報である。

図書館のIR実務担当者、ILL実務担当者へのアンケート自由記述意見

加速すべき / 「OA文献の増加」状況は望ましいものと思われますが、「研究者の研究活動およびILL業務」への影響は判然としておりません。貴プロジェクトには期待しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします / OA文献が増えることはよいと思います / 本学の場合，文献複写依頼件数が減少傾向にないとの状況であるが，今後文献複写依頼件数が減ることになれば大変助かるものと思われる。その分参考調査や利用者教育に時間をかけることが可能となる。本学においては，まだまだIRを含めOA文献の認知がされていない状況であるため，今後，IR広報を含めOA文献の状況を広報する必要がある。また，ガイダンス等において積極的にOA文献のことも取り入れていく必要があると思う / OA文献が増えれば、研究者は必要な文献をすぐに入手出来ることにもなるので、良い環境になるのではないでしょうか。さらにILL業務の軽減が図られます / OA文献の増加によって、利用者がILLを利用しなくても無料で文献入手出来るということは周知の事実ですし、より理想的な方向に進んでいると思います。統計上では国内ILL文献複写発生数が減少しているため、ILL業務量も減少と思われがちですが、これまでにないILL担当者による利用者への適切な指導、若しくはCiNiiや I R等の地道な宣伝活動といった業務が、ILL担当者の担ら役割及び業務内容が、ここ数年で大きく変わりつつあるなと思います / ILLでやり取りされている論文をIRに登録することができれば、IRの論文件数の増加及びILLの作業省力化につながり、IRとILL業務が密接に関わることになる。そうなることでIR担当者とILL担当者が協力し、IRを活性化することができれば望ましい / ILLより時間的、金銭的に制約の少ないOA文献にシフトしていくのは当然です。ただし、著作権等の問題でOA化できないものも多くあります。電子化にこだわらなければ、ILLを利用して（小樽商大の無料ILLのように）よりOA的な方法で公開することができます。規模は縮小しても、電子ジャーナルやOA文献を補完するという役割がILL業務にはあるのではないかと思います / 今後の趨勢として、研究発表の形式が紙媒体から電子媒体へ移行してゆくのは間違いないと思われるので、紙媒体を前提としたILLの件数が減少するのは当然であると思う / 紀要類についてはその通りで、IRに自大学発行の紀要（誌面を電子化したもの）を入れていくことには大きな意味があると思います。上の２．の回答はこれにあたります。ILL減少の原因が（契約料の要る）電子ジャーナルによるものとOAによるもの、どれくらいの割合になるのか、分かれば興味深いです / 複写発生数がIRによって抑えられることは大変望ましいことと思います。より早い情報の提供を実現していると考えるからです。各IRに収録された情報が一括検索等により研究者にも職員にも探しやすい状況が構築され、いっそう情報の流通を活発化することができればよいと思います / ILL文献複写発生数の減少は電子ジャーナルの急激な普及が貢するところ大であるが、これは依然として予算に恵まれた研究者がILLを利用しないで済んでいる状況を示していると思う。真に望ましいILL依頼減少の実態はOAの普及浸透によってもたらされなければならない。まだまだOA文献は数が少ないがこれを一層増加させ、学術情報の入手に現在のようにコストがかかる状況を異常だと研究者が感覚するのが通常とならなければならない。研究者の自覚を斯く導くためにILL依頼実績のある文献についてその故に著者に説いてIRに搭載する試みは極めて有効な手段と謂える。単にIRに文献を搭載していく、利用するに便なる仕様を実装する、等のエ夫はそれぞれに成果をあげることが期待できるが、戦略の主眼は研究者のOAに対する興味をいかに惹くか、OAが必須且つ主たる自然のことなるとをいかに研究者に理解させるか、にあると思う / OA文献の増加は大変好ましい傾向にあると思われる。私立大学の図書館では専任職員数が減少し、また、図書館員の一般事務職員が人事異動で配属される状況になっている。委託業務が推進される中で、従来になかった業務を立ち上げる事は非常に困難である。IR収録文献増強への取組みは、できるところから少しずつという形で、むしろ現行の業務負荷を軽減し、余裕を作り出した範囲で取組みたい。また、ILL業務においてもOA文献を取りこぼす事が無いような手順を考えていく必要があると考えている / 良いことだと思う。既知のことだが、ILLのリクエストは看護系の雑誌が多いため、看護系の学部を持たない本校のような場合は、貢献できるという期待をあまり持つことができないため、ILLとの協力ということを推し進め辛い。しかし、ILL担当部署とは全く情報交換をしていないため、調査をしてみたいとは考えている / OAにより入手可能になると、ILLを経ずに済むため研究者にとってメリットがある。さらに、これまでならILLまで至らなかった潜在的利用も開拓される。一方、ILLでしか入手できない文献を参照することは、研究者にとって、以前よりもさらに億劫な作業とみなされるようになるのではないか。したがって参照されるべき文献は、図書館での複写やILLにより入手しなければならない状態から、OAで入手できる状態に移行することが望ましい / ILL業務は非常に手間・コストがかかるので、限られた人員でより充実したサービスを、図書館が今後も提供し続けるためには、良い傾向と思うし、促進していくべき方向だと思う。もしIRとILLがうまく連携している図書館があるならモデル図書館として、全国の図書館に教育・啓蒙活動をお願いしたい / 文献へのアクセスがスピードアップし、ひいては研究のスピードアップにもつながる可能性はあるかと思います。本学記要へのILLリクエストは現状ではほとんど無いので、紀要のIR登録は今のところ業務へ影響を与えていないようです / ILL業務の減少は、他業務が各種増加している昨今において、とても有益な状況と言えると思う。また、研究者自身にとっても、時間にとらわれず文献を入手できる環境にあることは、その研究活動が円滑に行われることが容易に想像できると思う / 図書館員としてはOA文献が増加し、ILL文献複写件数が減少することはよい傾向で、本学のIRにも需要の高い論文を積極的に登録したいと考えている。（ただし、研究者の立場での著作権保護の問題があるとは思うが。）今回のアンケートと直接関係はないが、IRの収録文献数がCiNiiに匹敵する規模になってきたとのことで、CiNiiとIRの相互連携について、現状よりもさらに簡便になる仕組みを検討していただきたい / IRに掲載されることによりILL作業が軽減されることは良いことと思います。学内紀要については発行大学のIRに全て掲載されることが望ましいと思いますが学部等の総意が必要になると思います。当大学は過去分に関して著者の許諾が得られたもののみを掲載している現状です / OA文献が増加することは良いことだと思うが、著作権処理、電子化作業、Web上での公開作業など、OAに至るまでの作業負担が大きいと思います / IR担当者の立場からは、好ましい状況であると思われるので、直接利用者と接することの多いILL窓口と連携して、IR登録を推進していきたい / IR収録文献の増加によりILL件数が減少することは、研究者の情報入手と、図書館業務の省力化や費用削減等の両面で好ましい状況だと思います / OAによってILLが減少し、余分なコストが削減されることは喜ばしいと思います。その一方，「所属研究者の成果」を収集するという性質のIRが，ILLの要求に対してどこまで効果があるのかがまだ疑問であるので，今回のアンケート結果にも注目しています / ILLが減って、利用者が自分で文献を手に入れられるのはいいことだと思う / より早く、より簡便に、文献を入手できるようになることは、研究活動にとって無条件にプラスだろうと思います。大学図書館は、電子ジャーナルの提供、ILLでの文献提供、OAの推進、とそれぞれの活動によって、相互に補完してより豊かな学術情報の流れを提供できればいいと思います。特に、電子化が遅れている、日本（語）のジャーナルについては、私たちのIR事業が電子ジャーナル化で役立てるのではないかと思います。大学発の記要類や報告書類は大学がOAで提供するという流れが定着すれば、研究活動にとっても、わかりやすく有益ではないでしょうか / 良い状況であると思う / 研究者が希望する文献が，研究者自身の手によって即座に入手できるようのは素晴らしいことだと思います。ILLを仲介することによって，情報の伝達ミスや，様々なアクシデント等のため，文献の入手が遅れてしまうこともありますが，それらを解消する画期的なサービスだと思います。また，将来的にはILL業務担当者の業務が軽減される可能性も含んでおり，その際にはこれまでILL業務に費やしていた労力を新たな図書館サービスを展開させる一助となりえる可能性を秘めているものと思われます / ILL業務の中で「人間リンクリゾルバ」的な業務量が増えてきている。省力化の観点から，「本来のリンクリゾルバ」を調べた後，ILL依頼を行ってもらうという流れを作る必要があると思う。・ILLの世界での“人気アイテム”をIRに反映させるという試みは，研究者・図書館員双方にとって有効だと思う。ただし，今後は発行直後からOAまたはIRで公開というものがさらに増えると思うので，“ILLからIRへ”という流れで登録できる件数は，段々と少なくなる気もする。・NACSIS-ILLで依頼を行う際に，「ボタンを押すとJAIROを自動検索」という仕組みをNIIに用意して頂けると便利だと思う。・各大学研究者の業績について学外からILL依頼があった際，取りあえず電子化し，ILL依頼に備えて保存（公開できるものは公開，それ以外はダークアーカイブに保存）しておくという運用が取れれば，効率的な気がしますが，著作権法上認められないでしょうか？何より学内者かどうかの判断が難しいですね / ILL 件数の減少については，OA文献の増加よりも電子ジャーナルの普及の影響の方が大きいと考えるが，今後，OA文献の増加が，さらにILL 件数を減少させる可能性があることについては同感である。ILLの件数を減らすという意味では，実際にILL で需要のあった文献をターゲットにして登録するのは有効と思うが，紀要など，大学の刊行物の電子的な公開を促進するだけでも，かなりの件数を減らすことができるし，ILL 担当者やIR担当者の負担も軽いのではないかと思う / 図書館が発信する学術情報が利用され、その一方その影響としてILLが減少することは、図書館が学術情報流通を創造的に変革することになり、大変意義の大きい活動であると考えます / OA文献が増えてILLに依頼しなくても文献を入手できるようになったことは、研究者にとって大きいメリットなっていると思われます。ただ、OA文献が増加していくにつれて、例えば雑誌掲載論文など、雑誌・電子ジャーナルの販売に影響が出るようになった場合の出版社等の対応が多少心配になるところです / 大変素晴らしいことだと思います。ILLとIRを関連付けて考えることは，図書館が提供するサービスを総括的にとらえ，再構成を考えるためのきっかけになると考えています。とは言え、本学の場合，組織や人員，さらには職員の意識（文化）の問題が障壁となり，いかに実現していくべきか，その具体的プロセスがなかなか見えません。IRcuresILLでは，今回の調査結果などを踏まえた，IR-ILL連携実現に向けてのモデルプランをお示しいただければと，大変期待しております / 現況について、IR公開を促進することに繋がり、OA文献の増加が広く周知されれば、研究者、ILL担当者にとって、有益なことだと思われる / 当館では、レファレンスに調査依頼のあった文献（特に学位論文）については著者とコンタクトをとる機会が多いため併せてIRへの登録を依頼することがありますが、業務の流れを作るのが意外と難しいです。担当者としては、需要の多い文献をOAにすることこそ本望です。（参考までに研究者の反応列挙：・著者稿の提供を依頼した時「何のためにILLという制度があるんだ」と言われたことがあるが、この研究者はたぶん自分がWebで文献を入手できることには異存はないはず。・需要の高い文献こそ無償で持って行れるのは困る。） / 図書館界にとって業務の省力とする効率的なことと思われます。（利用者がILLに申込む前にIRを検索するようになるまでには，各機関のコンテンツ登録の努力が必要となりますが） / IRでのOA化が進むことにより、ILL業務自体が将来的になくなることが望ましいが、著者最終原稿という制約がある限りは期待できない。ただし大学の紀要についてはオリジナルのものをIRに登録できるので、まずはそのような大学オリジナルのコンテンツを優先的に登録していきたい（もちろん、学術雑誌の登録も怠りませんが）。日々の業務で感じることとして、図書館はさらなるサービスの充実を求められている一方、徐々に職員数は減っている。図書館の中では比較的新しいIR業務が、これまでの図書館の業務の見直しにつながり（まさにIRcureILL）、より必要なサービスに人をさけるようになれば、IR担当としてもやりがいがある / 研究者には、欲しい文献を、無料で即時に入手できることになる。一方、図書館員には今までILL業務に費やしていた労力・時間を参考調査等の利用者サービス業務に使うことができる

研究者のILL情報流通の実態と図書館業務IR・ILLの実態 どう融合しIR文献を増やしていくか？